

指導と評価の計画【地理歴史科：歴史総合】

単元名 C 国際秩序の変化や大衆化と私たち

内容のまとめり 第一次世界大戦と大衆社会

1 単元の目標

第一次世界大戦の展開，日本やアジアの経済成長，ソヴィエト連邦の成立などを基に，第一次世界大戦の推移と第一次世界大戦が大戦後の世界に与えた影響，日本の参戦の背景と影響などに着目して，主題を設定し，日本とその他の国や地域の動向を比較したり，相互に関連付けたりするなどして，第一次世界大戦の性格と惨禍，日本とアジア及び太平洋地域の関係や国際協調体制の特徴などを多面的・多角的に考察し，表現し，総力戦と第一次世界大戦後の国際協調体制を理解する。その際，20世紀初頭から戦間期にかけての日本を中心に世界的な動きと関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に追究，解決しようとする。

2 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・第一次世界大戦の展開，日本やアジアの経済成長，ソヴィエト連邦の成立などを基に，総力戦と第一次世界大戦後の国際協調体制を理解している。	・第一次世界大戦の推移と第一次世界大戦が大戦後の世界に与えた影響，日本の参戦の背景と影響などに着目して，第一次世界大戦の性格と惨禍，日本とアジア及び太平洋地域の関係や国際協調体制の特徴などを多面的・多角的に考察し，表現している。	・20世紀初頭から戦間期にかけての日本を中心に世界的な動きと関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に追究，解決している。

3 指導と評価の計画（5時間）（○…「評定に用いる評価」、●…「学習改善につなげる評価」）

次	時	学習活動	評価の観点			評価規準等
			知	思	態	
第1次 第一次世界大戦の勃発	第1時	【ねらい】 第一次世界大戦の展開 【課題】 総力戦となった第一次世界大戦後の国際協調体制を理解する。				
		緊迫する国際関係 ・19世紀末から20世紀初頭の各国の対立・同盟関係は，どのような目的でそれぞれ成立したのか考察する。		●		・第一次世界大戦前夜の列強の対立軸について，多面的に考察している。
	第2時	第一次世界大戦 ・第一次世界大戦がそれまでの戦争と異なっていた点を整理する。			●	・総力戦の中で，それまでの戦争との相違点を意図的に考えようとしている。

(3) ノートの記入内容を用いた評価について

- ・ 第5時の「ヴェルサイユ体制とワシントン体制」の○印は、複数の資料を用いて、主題についてまとめられているかどうかを確認する場面を表している。
- ・ 評価の際、以下の観点よりA～Cの評価づけをした。
 - 「国際連盟の発足…①」「大国不参加や経済制裁のみ、全会一致などの課題…②」「第二次世界大戦へ発展…③」「日本の常任理事国入りや軍縮の進行…④」と置く。
 - 努力を要する（C）…①か②のみの記述にとどまる。
 - おおむね満足できる（B）…①と②が記述されている。
 - 十分満足できる（A）…①と②に加えて、③か④が記述されている。
- ・ 上記の観点より、第5時の○印の場面での生徒の記述例の内、例1は「努力を要する」状況（C）、例2は「おおむね満足できる」状況（B）、例3は「十分満足できる」状況（A）と考えられる。

例1：「努力を要する」状況（C）と考えられる生徒の記述例

第一次世界大戦の被害の大きさによって集団安全保障が採用され、平和に向けて史上初の国際平和機構として国際連盟ができた(①)。

例2：「おおむね満足できる」状況（B）と考えられる生徒の記述例

国際連盟(①)を発足し、集団安全保障を原則とした。しかし、アメリカやソ連などの世界の中心となる国が不参加だった(②)ため、力には限界があった。

例3：「十分満足できる」状況（A）と考えられる生徒の記述例

集団安全保障のために国際連盟をつくり(①)、力の弱い国も平等になるように一国一票の理念などをつくるなどした。しかし、アメリカが不参加だったり(②)、戦争を防ぐ対策がなかったりしたことから、平和を保つことはできなかった(③)。

(4) 振り返りシートを用いた評価について

生徒が、次の学習に向かうことができるようになることを目的として、振り返りシートを用いて、「主体的に学習に取り組む態度」の「②自らの学習を調整しようとする側面」を点数化した。なお、「①粘り強い取組を行おうとする側面」は、ノートの提出等で評価した。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ

○「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、という二つの側面から評価することが求められる。

○これら①②の姿は実際の教科等の学びの中では別々ではなく相互に関わり合いながら立ち現れるものと考えられる。例えば、自らの学習を全く調整しようせず粘り強く取り組み続ける姿や、粘り強さが全くない中で自らの学習を調整する姿は一般的ではない。

②自らの学習を調整しようとする側面

ホームページ 国立教育政策研究所 「学習評価の在り方ハンドブック」 (高等学校編) (令和元年6月) より引用しました。

振り返りシートは以下の10項目について、それぞれ0～2点、合計20点満点で自己評価する。なお、振り返りシートは定期考査・課題考査ごとに提出する。

1. 授業での学習に意欲的に取り組んだ。
2. 授業や家庭学習を通して、疑問点を解決しようと努力した。
3. 授業や家庭学習を通して、現代社会で起きている出来事やニュースと授業内容を関連づけながら考えることができた。
4. 毎時間の授業の内容を自ら整理できた（まとめることができた）。
5. 今回学んだ章で、分かったことを2つ書く。
6. 今回学んだ章で、さらに学びたいことを2つ書く。
7. 今回学んだ章に、一文でタイトルをつける。
8. 授業と家庭学習において、自分のアピールできる点を2つ書く。
9. 次の章の学習に向けて、取り組んでいきたい点を2つ書く。
10. 次の章に関して、学びたいと思った点を2つ書く。

(5) 「授業と学習評価の改善」について

(ア) 授業改善について

- ・ 年間を通して、授業の目標を「生徒の学びに向かう力の向上と育成」に置いた。
- ・ 目標達成のための方策として、「授業内での教員の発言場面の削減」と「授業内での生徒の学習活動時間の増加」を実践した。
- ・ このような授業形態が機能しているかどうかは、提出されたノートで「十分満足できる」状況(A)の生徒の割合の増減で測ることができると考える。
- ・ 年度途中での改善点は以下の通りである。
 - 質問が生徒から出てこない時に、資料を指定して読み取りをさせるようにした。
 - ノートの記述について、十分満足できる評価の生徒に発表させた。

(イ) 評価改善について

- ・ ルーブリックを作成し、評価にかかる時間を削減した。

5 今後の課題

(1) 働き方改革を見据えたデータ集約について

(ア) 指導面について

- ・ 繰り返しの取り組みや問いかけにより、問いに対する的確な解答となることを意識させる。
- ・ 自己評価を点数化しているため、自己評価が高まるような声かけやノート返却を研究する。

(イ) 評価面について

- ・ 客観的資料となるように評価を数値化しているが、データ処理の時間を削減するため、提出はMetaMoJi 上で行い、CSV出力後にExcel内のクエリを用いて行う。

(2) ファシリテーションスキルの向上について

ファシリテーションスキルを、生徒の活動が活発になるよう促す能力と置く。その上で、具体的な能力を次のように設定した。結果として、生徒が新たな課題を発見したり、課題解決に向けて主体的に深い学びをしたり、多様な歴史の捉え方や学び方を見出すことに繋がればよいと考える。

(ア) 生徒から質問が出やすくなるような資料提示と問いかけのスキル。

(イ) 生徒からの質問に対して、解答に向けたヒントをタイミングよく与えられるスキル。

(ウ) 多様な意見の共通点や相違点をまとめるスキル。

(エ) 生徒とのコミュニケーションを楽しむスキル。